日本十二支考〈寅〉

濱田　陽

一　語源―日本の虎認識と語源説

虎の日本読みである「トラ」の語源説を拾い集めてみると、日本語起源説四つと外国語起源説五つに整理することができる。

日本語を起源とする説

まず、日本語起源説から見てみよう。

①虎が人里から離れて住む動物であるところから、遠く隔たっている様をいうトヲラカに由来する。鎌倉時代の国語辞書『名語記』（一二七五年成立）による説。

②虎が恐ろしくて捕らえることができないことから、捕らえるの音のトラエルから生じた。江戸前期の語学書『和句解』（一六六二年刊）による説。

③虎が人を捕らえる動物であることから、捕らえるの音に由来する。江戸中期の儒学者・貝原益軒が著した語源辞書『日本釈名』（一六九九年成立）による説。また、江戸後期の語学書『言元梯』（一八三〇年刊）、昭和初期の語学書『日本語原学』（一九三二年刊）もこれに類似した説をとる。

④虎皮の模様にちなんで、斑（ハン）の和語であるマタラが転じた。江戸中期の百科事典『類聚名物考（るいじゅうめいぶつこう）』（成立年未詳）、及び、『言元梯』による説。

外国語を起源とする説

他方、外国語起源説は、以下のものがある。

⑤朝鮮語に由来する。江戸後期の語源解説書『名言通』（一八三五年）、及び、明治時代、靖国神社三代目宮司・賀茂百樹（かもももき）が著した『日本語源』（一九〇〇年刊）の説。

⑥朝鮮の古語で毛の斑を意味するツルから転じた。国語学者・大槻文彦が著した日本初の近代国語辞典『言海』（一八八六年成立）の増補改訂版で昭和初期刊行の『大言海』（一九三二年刊）による説。

⑦済州島に古代から中世にかけて存在した王国・耽羅（たんら）（tam-ra）から来た獣であるからトラとなった。国語学者・岡田希雄（よしお）が昭和初期に著した論文「虎の語源と耽羅国」（一九三三年）で唱えた説。

⑧春秋戦国時代に中国南方の長江流域を支配していた楚国の方言「於菟（オト）」からの転音で、「ラ」は助語。漢学者・狩谷棭斎（かりやえきさい）が江戸後期に著した『箋注和名類聚抄（せんちゅう）』（一八二七年成立）の説。同書は、平安時代中期に成立した分類体による日本初の漢和辞典『和名類聚抄（わみょうるいじゅうしょう）』（九三一―九三八年編纂）の注釈書である。なお、同書が虎を止良と漢字表記していることから平安時代の人々が「トラ」と発音していたことが分かる。

⑨タイ語系南方語を起源とする。大正・昭和期の民族学者、神話学者・松本延広（のぶひろ）が「南方産動植物本邦名の研究」（一九四〇年）で唱え、国語学者・新村出（しんむらいずる）が踏襲した説。

虎語源説の変化

日本語起源説は、一三世紀の鎌倉時代と一七世紀～一九世紀前半の江戸時代を通じてみられ、二〇世紀前半の昭和初期にも登場している。これに対し、外国語起源説は、一九世紀前半の江戸後期から現れ、明治時代、昭和期にも新たな説が唱えられている。おそらく近代的な国語学や言語学が発達する過程で、「トラ」を外国語起源とする見方が有力となっていったのだろう。中国博物学の研究者加納喜光（よしみつ）が著した『動物の漢字語源辞典』（二〇〇七年刊）、及び世界的な漢字学者白川静の手になる古語辞典『字訓』（二〇〇五年刊）では⑥朝鮮古語説と⑧楚国方言説だけが紹介されている。また、新村出は、今日最も普及している国語辞典の一つ『広辞苑』（一九五五年初版発行）を編纂しており、同書に⑨タイ語系南方語説が挙げられている。

したがって、現代では⑥⑧⑨の説が有力といえよう。新石器時代にあたる縄文時代には日本列島の虎はすでに絶滅しており、外国語起源説に拠って考えることが一般的である。虎が国内に存在しなかったために、「トラ」の語源説の変遷は、近代化過程の日本人の海外認識の拡大を示していると見ることもできる。

しかしながら、虎が人里離れて住むこと、捕らえるのが難しいこと、人を捕らえる動物であること、独特の斑模様をもっていることから発想した、日本語起源説もそれぞれに興味深い。武士が政権を担っていた鎌倉時代や江戸時代に、「トラ」の言葉の由来を生きている実物を見ないまま日本語のなかで想像している。語源説としてはほとんど省みられなくなったけれども、昔の日本人の虎イメージの一端をうかがい知ることができるのである。

二　信仰―海を渡った虎の霊力

虎のいない国の不在

日本にいない虎がなぜ日本人の民俗的な信仰を集めるようになったのか。

日本に虎がいた時期をさがそうとすると、一つ前の地質年代の更新世にまでさかのぼらなければならない。この時期、日本はユーラシア大陸と地つづきだった。しかし、氷河期が終わり、一万二～三千年前に大陸から切りはなされ、縄文人がようやく活躍しはじめた頃には虎はいなくなっていた。生態系の頂点にいる虎のような大型肉食動物は小さな島では種族を維持することが難しかったためだろう。つまり、日本人は、生活のなかで生きた本物の虎に出会うことはなかったのだ。これは朝鮮半島、中国、インド、東南アジアなど、日本と関わりの深いアジアの人々の生活史と大きく異なるところである。山や森に虎がいないため、神とされたのも、イノシシや熊など日本に生息する動物であった。ところが面白いことに、この不在なはずの虎が、日本人の信仰生活に、その鮮やかな縞模様にも似た豊かな彩りをもたらしているのである。

その理由は、海によってつながる人と物の交流によるものだった。外交使節の貢物として、国際貿易の商品として、虎皮が日本に持ち込まれた（保立、一九九三、二〇九―二一七頁）。また、半島や大陸に渡った人々は、生きた虎を見聞し、日本に帰って体験談を伝えた。朝鮮や中国の文化、そして、それらを介してインド文化にふれながら、虎にまつわるさまざまな説話と習俗ももたらされることになった。

玉虫厨子、キトラ古墳―古代の虎

奈良の法隆寺に伝わる国宝、玉虫厨子には、有名な捨身飼虎図が描かれている。釈迦の前世の姿であるサッタ王子が、餓死寸前の虎の親子にわが身を与えて救う物語だ。三人の王子が竹林に遊んだとき、七頭の子供を産んだ母虎が七日を経ても食べ物がなく、子供を食べてしまいそうな場面に出会った。兄の二人の王子は哀れに思いながらも立ち去ったが、末のサッタ王子は、慈悲心と悟りを求める気持ちがあまりに強く身を投じた。虎に食べる力がなかったので、王子は自ら竹で首をさし血の垂れるまま虎に近づいた。虎は骨を残して王子を食べ、かけつけた王と王妃は、悲しんでその骨を供養したという。『金光明経』に収録されているストーリーである。玉虫厨子の製作は七世紀中頃で、国産の桧が用いられていることから日本でつくられたものだが、渡来系工人の手による可能性が高いといわれている。中国の敦煌壁画にも捨身飼虎のテーマで描かれた図像が見られ、中国南北朝文化の影響が色濃く出たものであると考えられている。

少し時代が下って、七世紀末から八世紀初めと推定されるキトラ古墳に描かれた壁画には、虎の頭をもった獣頭人身像が二〇〇二年に発見されている。天皇の皇子もしくは亡命してきた百済王の王子が葬られていたと推定されるこの奈良の古墳が注目されたのは、現存する世界最古の天文図が見つかったためであるが、虎頭の人身像もそれに劣らず話題になった。それは日本の古墳において初めて発見された被葬者を守護する十二支像であったからだ。この壁画には、先に発見された高松塚古墳に次いで国内二例目となる四神像もあった。いうまでもなく、西側には白虎が描かれている。キトラ古墳壁画は、古代の中国、朝鮮と

の文化的つながりを雄弁に物語る貴重な例である。大陸と半島の信仰に登場する虎が、ほぼダイレクトに日本に伝えられているのである。

『日本書紀』にみる虎信仰の原型

最古の勅撰正史『日本書記』（七二〇年）にも、百済、高句麗、新羅の三国の虎にまつわる記述が一つずつ残されている。百済の浜辺でわが子を食べられた貴族が虎を退治し皮をもちかえる話（五四五年）、高句麗に留学した僧が虎に霊術を習う話（六四五年）、新羅から虎皮の貢物が届けられる話（六八六年）の三つである。このうち、後の二つが虎に対する日本人の信仰の原型を示しているように思われる。

女性の皇極天皇が即位して四年目の六四五年。この年は皇極の子である中大兄皇子と貴族藤原鎌足によるクーデター（乙巳の変）がおこり、政治の実権をにぎっていた蘇我氏一族が滅ぼされたのであるが、クーデターがおこる以前の四月一日に虎にまつわる次のような記述が挿入されている。高句麗に留学した学問僧たちが帰国したが、仲間の鞍作得志が戻らなかった。得志は虎を友として、いろいろな霊術を習得した。枯山を青山に変えたり、黄土を白水に変えたりするなどしたが、虎は究めつくすことができないほどの術をもっていた。さらに針を得志に授けて虎は「決して人に知られるな。これで治せば、癒えない病はない。」と言った。言葉どおり治らない病はなく、得志はいつも与えられた針を柱の中にかくしていた。しかし、なぜか虎は後に柱を折って針をもって逃げてしまった。高句麗の国は得志の日本帰国の意思を知り、毒を与えて殺してしまった。なんとも不思議な話であるが、鞍作は蘇我入鹿の別名であることから、入鹿殺害

の前兆を示す話として挿入されたのではないかとも考えられている（小島他、一九九八、九七―九八頁）。

また、中大兄皇子の弟、天武天皇の最後の年、六八六年四月一九日に新羅の調物が九州地方から届けられた。その中に良馬や金銀とともに、虎皮・豹皮と薬物が含まれていた。天皇は病気がちで九月九日に崩御する。治病効果をもたらすものとして求められたのだろう。

輸入された虎皮―天皇から貴族まで

このように虎が目に見えない霊力をもち、虎皮などの品が人の命を守るために効果を発揮するという信仰は、いろいろなヴァリエーションとして後の時代に現れてくる。この虎信仰を物質的に担保したのが虎皮の輸入だった。たとえば平安時代には、海をはさんで渤海との間に国際交易が行われており、渤海使が七二七年から九一九年までのおよそ二百年間に三四回訪れ、国際貿易品目と貢物の代表は虎皮であった（保立、前掲、二二一頁）。虎に宿る霊力は無病息災と護身に頼もしいものであり、九五〇年に冷泉天皇が誕生したとき、サイの角と虎の頭を枕元においたが、これらは急に手に入れようとしても難しいのであらかじめ準備しておくべきものと考えられた。九五二年、観音霊場として有名な奈良の長谷寺に、新羅の皇后から贈られた宝物の中に虎皮と豹皮がみられると『長谷寺霊験記』にある。

日本の中世では、虎皮は唐皮（からかわ）とも呼ばれていた。これは、舶来の皮という意味だ。当時の皇族たちは、異国情緒豊かな舶来品として、虎皮を珍重した。朝鮮のみならず、中国も虎皮の豊かな国と想像されていた。『玄奘三蔵絵』など唐を描いた絵画にもしばしば虎皮が登場している。中国では、新生児に虎の頭を

漬けた湯を浴びさせて無病を祈る風習があったらしいが、一〇〇八年の後一条天皇誕生時にもこれを取り入れた儀式が行われている。

高位貴族も虎の恩恵にあずかろうとした。鎌倉時代初期に描かれた『北野天神縁起絵巻』（一二一九年）には、左大臣藤原時平が病の床に臥し、腰に虎皮を巻いている絵が描かれている。時平がおびえているのは、大宰府に流され非業の死をとげた道真の怨霊である。時平は道真の政敵であった。菅原道真の伝記や霊験を描いたこの絵巻からも、虎が当時の貴族社会でどのような信仰と結びついていたかがよくわかる。

虎を求めた武士たち―武士と虎

さて、平安時代の末、武士が台頭する源平の戦い以降の時代になると、虎の民俗的信仰は、武士たちにも広がっていった。もともと五位以上の貴族にしか使用を許されない身分的な意味をもった財物が虎皮だった。ところが、その虎皮が武具の材料に使われるようになる。もっとも有名な例の一つが、平氏一族に九代にわたって受け継がれた、その名も唐皮という鎧である。平氏の先祖桓武天皇の叔父にあたる仏僧が平安京正殿で祈ったときに天から落ちてきたと伝えられ、虎皮でつくられていた。また、太刀の鞘を包む袋や、馬の鞍の下に敷く敷物などに虎皮がひんぱんに用いられた。武士たちが虎皮にこだわったのは、それを身につけることによって強い虎と同一化し、また虎の霊力によって我が身を護ろうとする願いからであった。元と高麗の連合軍が攻めてきたときにも、虎皮の力に頼っている。『蒙古襲来絵詞』には、連合軍に立ち向かう武将の馬の背に虎皮を敷いた絵が描かれている。虎皮の武具は恩賞として武士に与えら

れることもよくあったようだ（保立、前掲、二二〇―二二一頁）。

日本への虎皮の輸入が武士たちの願いを物質的に支えていた。国際交易にたずさわる商人たちは、割のよい商品として、異国情緒に満ち霊験あらたかな虎皮の魅力を効果的に訴えただろう。このように虎にまつわる信仰は、狩猟採集や農業ではなく商業や外交と結びつきながら広がっていったのである。絵画史料に描かれた虎の武具を見ると、そのあまりの多さに、それらが全て本物ではないだろうと疑う研究者もいる（保立、前掲）。それほど多くの例があり、武士たちに流行していた。虎の武具全てが本物ではなく、虎皮を手に入れられない武士たちのために、染めてデザインされた品が出回ったとも考えられている。

虎張子―世界を駆けた庶民の創造力

江戸時代になると、無病息災や護身にありがたい虎の霊力にたのむ信仰が庶民の間にも広がっていった。庶民は本物の虎皮を手に入れることはできないため、代わりにさまざまな虎玩具が考案された。なかでも代表的なものが、和紙を塗り固めてつくった虎張子である。これは、使い古した紙が多く出た京都や大阪を発祥としている。大衆小説作家、井原西鶴の短編小説集『男色大鏡』（一六八七年）に、すでに虎張子が大阪の人形屋で売られていたことをうかがわせる記述がある。虎玩具の登場によって、虎への信仰は一気に親しみやすいものになっていった。虎が勝負強く、千里を走るといわれ、また大切にわが子を育てることから、子供の健やかな成長を祈願するために、虎張子は用いられ、縁起物として記念品や贈答品にされた。また、魔除けと商売運のためにも虎玩具が飾られた。

虎玩具は、日本全国さまざまな品が郷土の信仰や風習に合わせてつくられてきたが、今日伝わるもっとも有名なデザインは、一八七七年（明治一〇年）に島根県出雲市の工芸師、高橋熊市がつくった虎張子である。四足をふんばり均整がとれた肢体、グッとにらんだ虎の面、少しの風や動揺にもすぐ首を振って周囲を見回す独特の風格、そしてピンと張ったヒゲとカラフルな色彩が、ユーモラスさもそなえた素晴らしい民芸品だ。高橋の虎張子は全日本郷土玩具展第一位に入賞、昭和三七年（一九六二年）の寅年に郵便切手の図案にもなり、海外に知られるようにもなった。古くは国際貿易品目の代表として半島や大陸から輸入された虎は、ついに玩具に身を代えて海外に求められ日本から輸出されるまでになったのである。

もし虎がもたらされなければ、天皇、貴族、武士から庶民にいたるまでの日本人の民俗信仰史は、またちがった風景になっていたかもしれない。虎がいなかったがゆえに、日本人は、外交や交易を通じて虎信仰をつくりあげ、子供や大切な人を守り、病気を治し、わが身を守護し、幸福をもたらしてくれる存在として、虎の霊力に憧れ、想いを賭けてきた。そして、この信仰が、朝鮮半島、中国、インドなどの文化との関わりのなかでこそ生まれ、日本に根づいてきたことは疑いのない事実なのである。

三　物語―虎退治譚を乗り越える精神の水脈

1　昔話の虎

負ける虎

日本列島に人が住むようになった紀元前一万年前後の縄文時代には虎はすでにいなくなっていた。韓国や中国と異なり、日本には虎が登場する本格的な固有の神話や伝説はないといっていい。

民譚では、「虎と田螺（筆者注　たにし　水田や池にいる小さな巻貝）の競争」「狼と狐と虎」がある。どちらも日本人の誰もが知っているような有名な昔話ではないが、口承文芸を専門とした稲田浩二が一千を超える昔話のなかから百三編を選んだ『日本の昔話』（一九九九年刊）に収録されている。これを手始めに日本の物語の虎について考えてみよう。

あるとき、虎がたにしと出会って、「お前など、そんなにのろのろと這っていたのでは、一日かかっても田の一つも渡れないだろう」と馬鹿にした。そうすると、たにしが、「そんなことはない。おれはお前さんより早く走れるんだ」と言い返した。そこで二人で競争することに決めた。たにしは、とれもかなわないと考えて、こっそり虎の尾にはさまった。虎がゴールにたどりついたとき、たにしは、尾からポロンと落ちてきて、「虎殿、虎殿おれはさっきからここにいるよ」と叫んだ。虎がびっくり

して見たら、たにしがちゃんといたので、とうとう虎の負けになった。たにしは、虎の尾の先にいて、道々引きずられてきたので、殻がすっかり痛んでしまった。たにしの殻のあちらこちらにあるのは、そのときの傷跡である。

（稲田、一九九九、六九―七〇頁。筆者により若干変更）

これは東北地方の秋田県で採録された「虎と田螺の競争」で、小さなたにしもだまして得た勝利のツケを払わせられているところに含蓄があるが、大きな虎はただ負かされる存在である。弱いものが強いものをだまして勝つところに特色があり、日本各地に伝わっている。もっとも、アジアの多くの民族に類話が認められ、日本固有の話ではない。

だまされる虎

「狼と狐と虎」は、本州に分布する昔話である。

むかし、日本の獣では狼が一番の大将、朝鮮では虎が大将。それで日本の狼が朝鮮に渡って虎と出会って、どちらが強いか戦おうということになった。帰ってきた狼が、獣たちを集めて、「朝鮮の虎と戦わなければならないことになったが、どうしたらよいだろう」と相談すると、獣たちは、「それなら狼さん、狐が一番賢いから、狐を遣ったらどうか」と答えた。それで狐が朝鮮に渡って、大きな、千里もある薮で虎と出会った。すると、虎が、「この薮を一周しようか。どちらが早くまわるか、競

争しようかい」と言うので、競争を始めたら、狐は虎の尻尾にひょいっと乗った。あと一歩で一回りというところまで来て、狐は尻尾からぱっと跳び降り、「虎君、ここだ」と現れたので、虎は、「ほう、狐、もう来ているのか。これは負けた。もう一度競争しよう。」と言って、もう一度競争した。やはり今度も、狐は虎の尻尾に乗っかって、先に飛び降りた。すると、虎は、「じゃあ今度は、吠え比べをしよう」と話して、先にウォーッと三里も遠くまで聞こえるほど吠えたてた。けれども狐は、「そんな吠え方は何だ。もっと威勢よく吠えなければならん」とけしかける。それで虎は、これでもか、これでもかと、必死になって吠えたてたら、とうとう首が飛び抜けてしまった。狐はその首をさげて帰って、それが今でも舞いに用いる頭になっているという。

（稲田、前掲、七一―七二頁。筆者により若干変更）

採録は京都府。これも、弱いものが強いものをだます話である。類話に、岩手県などに伝わる「狐と獅子と虎」があり、そこでは日本の狐、中国の獅子、天竺（インド）の虎が競争し、日本の狐が勝つ結末になっている。「虎と田螺の競争」も「狼と狐と虎」も、虎は知恵によって勝負に破れる存在で、とくに「狼と狐と虎」は、はっきり異国の動物の代表として日本の狐に負けている。昔話としては知恵くらべに焦点があるけれども、虎に注目してみると他にめぼしい神話がないせいか寂しさが残ることは否めない。

2　虎退治譚の系譜

古典文学、歴史書の虎退治譚

これらの昔話がどれほど時代をさかのぼるかは定かではないが、打ち負かされる虎は、日本の古典文学や歴史書にたびたび登場してくる。そこでは、どうしても虎退治や虎刈りのイメージが強く浮かび上がる。

森や山に実際に棲む獣の王としての虎は、日本人が体験することのないものだった。あくまでも虎は異国情緒にあふれ、珍重される存在だった。この、日本に不在な獣としての虎の特徴は、信仰生活には豊かさをもたらした。虎皮などの虎にまつわる品が天皇、貴族から武士にいたるまで重宝され、庶民には虎玩具がつくられて、無病息災や護身を祈願する大切なアイテムとなっていった。他方、虎は異国に棲む獣の王であり、それを退治することが日本人の武勇を示すものとして受け止められてきたのも事実である。

異国での虎退治は、話に尾ひれをつけやすい。実際は誰も見ていないのだから、帰国後に武勇談をつくることは容易である。異国の人々が、日本人の武勇を賞賛してくれたと自画自賛することも簡単だ。もし、日本に虎が棲息していたなら、虎退治の武勇談も、違ったリアリティーをもったものになっていただろう。イノシシや熊を山の神としてきた日本人である。虎に対する神聖な怖れの感情もつちかうことができたにちがいない。また、日本に虎がいれば、海外で虎を退治した話がそれほど珍しくなることもない。文学的想像力にとっては、虎の不在は不幸だったかもしれない。

『万葉集』にはすでに「韓国（からくに）の、虎という神を生けどりに」という作者不明の虎狩りの歌がある。『日本書記』（七二〇年）には、聖徳太子の祖父にあたる欽明天皇在位六年（五四五年）に百済に使節として渡った貴族が虎を退治する話が収録されている。膳臣巴提便（かしわでのおみはすひ）は百済の浜辺で虎に自分の子を奪われた。雪に印された足跡を辿って虎を見つけ、「私が苦労するのも愛する子に父の偉業を継がせたいとの一念からである。虎も威神といわれるからにはこの心が酌めないはずはない。早く出て来い、仇を取ってやる。」といって左手をさしのべ、虎の口から舌を引っこ抜き、右手で刺し殺したという。

この話は、武家政権の時代になり、鎌倉時代の説話文学を代表する『宇治拾遺物語』（一三世紀初）に再録された。また、『宇治拾遺物語』には、別の虎退治も収録されている。平安時代末期に主人の勘当を恐れた家来が新羅に渡り、そこで虎退治をして新羅の人々に賞賛され、それを多くの商人たちが聞きつけて主人に語り、日本的武勇を示したものとして主人が勘当を許したという話である。

これらに似た話が、鎌倉後期に成立した歴史書『吾妻鏡』にもある。平安末期の内乱で、対馬の長官の源親光（みなもとのちかみつ）が源平合戦に味方しなかったため平氏に追われ高麗に逃亡したときにともに連れた妊婦が出産することになった。荒野に仮屋を構えたところ猛虎がやってきたので、家来が射殺した。するとその武勇に感嘆した高麗国王が親光に「三ヶ国」を与えて帰国させないようにし、それが無理と分かると宝物などを与えて帰したという。

加藤清正と虎退治伝説

これらの話の共通点は、朝鮮の虎を狩ることが日本人の武勇の象徴として語られていることである（小林、二〇〇八）。異国で武勇が賞賛されたと国内向けにアピールしているところが注目される。このような物語のパターンが、加藤清正の虎退治に受け継がれていく。豊臣秀吉の朝鮮出兵（壬申倭乱）で出陣した清正は、破竹の勢いで軍を進めたが、虎がいたるところにあらわれて兵に害を与えた。馬やお気に入りの家来を捕られたため、大々的に虎刈りを行って軍の士気を高め、自ら槍の名手として獲物をしとめ、兵たちにも獲物の数に応じて褒美を与えたというのがその伝承の大まかな筋である。

清正がこの伝承のように大規模な虎退治を行ったことを示す史料的な明証はないという（保立、一九九三）。秀吉の命で薬用にするため幾匹かの虎を捕まえたであろうが、その場合もおそらく槍で立ち向かったのでなく鉄砲などで遠くから撃ったのだと考えられる。しかし、虎退治の伝承は清正の武勇を顕彰することによって、国内の目を朝鮮出兵がもたらした莫大な被害と日本の敗北という現実から逸らす機能をもつことになった。清正が主君（秀吉）への忠義心が厚く、城づくりの名手で善政を行ったとして地元の熊本県では今にいたるまで人気が高いことから、虎退治の武勇伝も語り継がれてきた。槍を手に持つ清正が虎を退治している場面は、たくさんの絵や人形に造形化されて現在に伝わっているのである。

3　近代文学者が描いた虎

中島敦『虎狩』、『山月記』

韓国で虎が絶滅したのは一九二四年で、それ以降、虎が見つかった記録はないという。近代化過程で、当時の朝鮮政府や日本政府が文字通り大々的に虎刈りを実施し、世界各地からもハンターたちが集まって虎を刈っていったためだという。

東京生まれの作家、中島敦（一九〇九―一九四二年）の小説『虎狩』は、中島の京城中学校時代の体験を小説化した作品である。京城中学校に通う日本人学生の「私」は、同級生の朝鮮人、趙大煥に誘われ、彼の父が指揮する虎狩の現場へ行ってその一部始終を目撃する。執筆が一九三四年（昭和九年）であるから、すでに虎はいなくなっていたわけだが、中島が中学生のときはまさに虎が絶滅する直前であった。ゆえに記録的な意味でも興味深い作品である。小説では、日本人と朝鮮人、両班階級（趙大煥）と人夫という差別構造が重層的に書きとめられ、植民地社会に生きる違和感が巧みに表現されている。とくに趙大煥は朝鮮人であることに誇りをもち、同級の美しい少女やデパートに飾られた熱帯魚の美しさに魅了される繊細な心の持ち主でありながら、身分の違う人夫に対して冷酷な態度を見せる複雑なキャラクターとして描かれている。

ところで、作品のなかでは主役の座を与えられず話題づくりに用いられた虎こそが、まさにその重層的差別構造を生み出した植民地主義のもう一つの隠れた犠牲者であったといえる。作中で虎は近代銃によっ

てあっさりと撃ち殺されてしまう。一方、虎に襲われておびえた人夫は、「虎に傷つけられもせずつまらない」といらだった趙大煥に足蹴にされるとはいえ、まったくの無傷であるからだ。

中島敦には虎に題材をとったもう一つの作品『山月記』（一九四二年）がある。高等学校の現代文の教材に採用されたため、こちらの方がとりわけ有名である。彼が三三才で病没した年に発表されたこの小説は唐代の李景亮が書いたといわれる『人虎伝』をモデルにしている。原作では、主人公の李徴は、非人道的な悪業によって因果応報的に畜生道に落ちる。その内容は、李徴がある寡婦と性的関係を結んだところ、寡婦の一家が彼を害そうとし女と思いをとげることができなくなったので風に乗じて火を放ち、その一家をことごとく焼き殺して立ち去った。李徴はそのために発狂し、ついには虎の姿になって山中の動物や人間をとって食べるようになったという話である。

ところが、中島は、時代設定はそのままに、李徴のキャラクターを孤独に苛まれる近代特有のエリート知識人の姿に変換し、主人公の内面のドラマとして次のように物語をつくりかえている。

李徴は博学の秀才であったが、下級官吏としての生活に甘んじることができず、職を辞し、詩人として名を後世に遺すことに人生を賭けた。ところが名声を得ることができず、妻子を養うためにやむをえず官吏に戻ったところ、かつて自分より才能のなかった同僚たちははるか高い位に出世していた。彼は、出張先でとうとう発狂し、気がついたときには虎になっていた。虎になった李徴は、偶然に山で出会った昔の親友に「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」が自分を追いつめたと告白する。つまり、誰にも負けない才能を自負していながら、それが本物でないのではと臆病になり、他人と交わって才能を磨こうとはしなかっ

た。その結果、人々からますます遠ざかり尊大な態度と羞恥心を習慣とするようになった。この「尊大な羞恥心」が自分と妻子、友人を傷つけ、ついには彼を内心にふさわしい虎の姿に変えてしまったのだという。

この小説も、主人公のキャラクターの複雑な造形が読む者の心に響くのであるが、虎自身は近代知識人の心理の一典型を象徴する存在に甘んじさせられている。

萩原朔太郎「虎」

大正から昭和初期には、感性の鋭い作家や詩人のなかに、虎の存在を気にかける者がいた。中島敦が『虎狩』を出したと同じ年に、研ぎ澄まされた感覚的表現で知られる近代詩人萩原朔太郎（一八八六―一九四二年）が次の詩を書いている。

虎

虎なり
曠茫として巨像の如く
百貨店上屋階の檻に眠れど
汝はもと機械に非ず
牙歯もて肉を食ひ裂くとも

いかんぞ人間の物理を知らむ。
見よ　穹窿に煤煙ながれ
工場區街の屋根屋根より
悲しき汽笛は響き渡る。
虎なり　虎なり

午後なり
廣告風船（ばるうむ）は高く揚りて
薄暮に迫る都會の空
高層建築の上に遠く坐りて
汝は旗の如くに飢ゑたるかな。
杳として眺望すれば
街路を這ひ行く蛆蟲ども
生きたる食餌を暗鬱にせり。

虎なり
昇降機械（えれべえたあ）の往復する

東京市中繁華の屋根に
琥珀の斑（まだら）なる毛皮をきて
曠野の如くに寂しむもの。
虎なり！
ああすべて汝の殘像
虚空のむなしき全景たり。

――銀座松坂屋の屋上にて――

（坪井、一九九四、二八九頁）

東京銀座の松坂屋百貨店の屋上で見世物になっていた虎に、朔太郎が自己を投影した詩である（坪井、前掲、二九〇頁）。煙をはく工場群、百貨店の広告風船、繁華街の屋根など、自らと無関係に発展を続けるかに見える大都会への違和感を虎に重ねている。この詩に登場する虎は、撃ち殺されはしないが、捕らえられ、檻の中に入れられた孤独な存在であり、虎退治譚の系譜にあるといえる。ただ、そこでは、虎とともに作者の自意識そのものが捕らえられてしまっている。近代人のうめきは聞こえても本物の虎の咆哮が聞こえてこないのは、虎を国土にもたなかった日本人の発想の限界を示しているのだろうか。

芥川龍之介『虎の話』

芥川龍之介（一八九二―一九二七年）にも『虎の話』（大正一四（一九二五）年）という次の小品がある（芥川、一九七八、一〇九―一一二頁）。

冬の夜、芥川を思わせる父親が五歳の男の子を抱いてコタツに入ると、虎の話をせがまれる。父は、「虎の話？　虎の話は困ったな。」と言いながら、子供が急かすので苦労して語り始める。……酒に酔った朝鮮のラッパ兵が山路で寝ていると、酒臭い息を尻尾でふさいで自分を食べようとしている大虎に気づき、ラッパをお尻に突き立てる。すると虎は逃げ出して、突き刺さったラッパが死ぬまで鳴っていた。ラッパ兵はほめられて虎退治のご褒美をもらう。

子供はこの話に満足せず、また虎の話をせがむ。父は、「そんなに虎の話ばかりありやしない。」と困りながら、二話目を語る。今度も朝鮮が舞台である。……漁師が山奥へ狩に行ったところ、谷底に大虎が歩いていた。打とうとした瞬間、虎はいきなり身を縮めたと思うと、向こう側の大岩に飛び上がった。だが、とどかずに地面に落ちてしまった。虎はもう一度もとの場所に戻り大岩に飛び上がったが今度もまた落ちてしまった。するといかにも羞しそうに長い尻尾を垂らして去っていった。その様子があまりに人間のように見えたものだから、かわいそうになって打てなかった。

子供はつまらないなあ、とまたまた虎の話をせがむ。父は、「もう一つ？　今度は猫の話をしよう。長靴をはいた猫の話を。」と言うが、子供が満足しないので、三度目の話をする。……昔、大虎が子供を三匹持っていた。日暮れになるといつも三匹の子虎と遊び、夜は洞穴へ入って一緒に寝た。（ここで子供が

眠りはじめる）。ところが、ある秋の暮、虎は漁師の矢を受けて、死なんばかりになって帰ってくる。三匹の子虎は直ぐに大虎に甘え、大虎もいつものように踊ったり跳ねたりして遊んだ。そして夜にいつものように洞窟に入って一緒に寝たが、夜明けになってみると、大虎はいつしか三匹の真中で死んでいた。子虎は皆驚いて……ここで子供が寝入ってしまう。

この作品でまず気づくのは、父親が虎の話をせがまれて困っていることである。韓国や中国のように子供に語れるほど有名な虎の物語がなく、作家でさえ、話を紡ぎ出すのに苦労している。最初の二話は朝鮮が舞台で日本固有の話は出てこない。最後の話も含めて、虎退治譚の系譜にあり、ユーモアをもたせようとしながら、すぐにもの哀しい結末に転じてしまう。しかも最後の虎は、芥川自身の投影に思えて来る。じつは、この小品を書いた二年後に、幼い三人の息子を遺して芥川は服毒自殺を遂げているのである。

中島敦、萩原朔太郎、芥川龍之介が描いた虎は、虎退治譚の系譜の残滓であり、あるいはまた、日本の近代化のなかで悩み抜いた個人の自意識の投影であるといえよう。

4　虎の不在がもたらした文学的不幸からの脱却をめざして

近松門左衛門『国姓爺合戦』

ただ、このような閉塞的な虎イメージに清々しい風穴を開けてくれる三つの事例がある。

一つ目は、日本のシェイクスピアといわれる劇作家、近松門左衛門の『国姓爺合戦』（一七一五年）である。

これは人形浄瑠璃として大阪で初演され、江戸で歌舞伎として上演されて、それぞれ大人気を博した近松の傑作である。主人公の和藤内は、中国人の父、日本人の母をもち、明国再興のために生きた実在の人物、鄭成功がモデルである。その名は、和（日本）でも唐（中国）でもない、という洒落からつけられている。中国人と日本人のハーフである主人公が父母とともに中国に渡り、清を思わせる敵と戦うという壮大なスケールで描かれた作品であるが、中国で敵軍を味方につける過程で面白い話が出てくる。和藤内は、千里ヶ原という広大な竹やぶで虎と出くわすのだが、力で退治することをせずに、母からもらったお守りで虎の力を封じ込める。また、この虎にお札をかけて自分に立ちはだかる軍隊に向かわせ、こわがった敵軍が彼の手下になる。

この話は虎退治のパターンを踏襲してはいるが、虎を殺すのではなく味方にしてしまう点で大きく異なっている。それには、何よりも主人公が国際人であることが関係しているのだろう。現地で崇められる虎を殺して武勇を示すのでは、国や民族を超えて味方を得ることはとうてい不可能だからである。

一休伝承「屏風の虎」

二つ目は、一休さんの「屏風の虎」だ。室町時代に活躍した著名な禅僧、一休宗純は、小さい頃から知恵の子として知られていた。天皇の血もひくこの見習い僧に関心をもった将軍、足利義満は、一休を武将たちが控える金閣寺の広間に呼び出した。義満は、屏風に描かれた、岩の間から眼を見開いて牙をかんだ大きな虎を指差し、「その虎を縛れ」と無理難題を投げかける。一休は動じることなく、「分かりました。

それでは縄をくださいませ」と願って、神妙な顔で縄を手にし、側にひかえる武将に「それでは私がつかまえますから、そちらに廻って虎を追い出してください」と声をかけた。武将は困り果て、立ち上がりもできず、断りもできず、一休と将軍の顔を見比べるばかりだったので、ついに将軍も一休の知恵に脱帽したという話だ。

実は、これは実話でなく、明治になって大衆話芸をいとなんでいた講談師が、江戸時代に流行した子供時代の一休にまつわる伝承をもとにつくりあげたものだという（岡、一九九五、六―七頁、一五四―一六一頁）。しかし、たとえ実話でなくとも、時の権力に媚びることなく、自由奔放に生き、庶民に尊敬されてきた一休という人物のイメージをうまくすくいあげている。しかも、この話が近代化の進む明治の日本で取り挙げられ、昭和初期に子供絵本のかたちになり、戦後の高度成長期以降にはアニメーションになって多くの日本人に親しまれた。

「屏風の虎」も虎退治譚のヴァリエーションの一つではあるが、自己満足的な殺伐とした虎退治が多く語られてきた中で、ユーモラスで快活な民衆の想像力が育んだ架空の虎の微笑ましい例である。ちなみに足利義満は、朝鮮や明との外交関係を切り開いた将軍であり、義満の子の義教（よしのり）が将軍の代に、朝鮮国王・世宗が派遣した初めての通信使が京都を訪れている。

虎女伝説『曽我物語』

三つ目は、忠臣蔵、伊賀越えの仇討ちとともに日本三大仇討ちの一つ、曽我物語に描かれた虎女（とらじょ）という

悲劇のヒロインのストーリーである。曽我の十郎と五郎の兄弟は父の仇を討つために命をかけて準備をすすめてきた。二人とも妻を持つことを考えなかったが、兄十郎は二〇才のときに一七才の美しい遊女、虎女と出会い、恋に落ちて夫婦となる。二年後、鎌倉に最初の武家政権が誕生したばかりの頃であるが、曽我兄弟はついに富士山の裾野で仇討ちに成功し、その結果、公権に取り押さえられ処刑されてしまう。虎女は二人の母を訪ねて慰めた後、出家し尼となって、生涯にわたって兄弟の供養を続ける。

虎女は、実在の人物であるが、なぜ名前に虎の字が用いられたかは良く分かっていない。曽我物語では寅年、寅の日、寅の刻に生まれたことに由来するというが、実際は未年生まれだとの説もある。しかし、情愛深く信仰厚い女性のイメージが虎の字と結びつき、独特の観念連合をつくりだしたことが興味深い。虎女伝説は脈々と語りつがれており、虎女が姿を変えたといわれる虎ヶ石がいくつも残されている（坪田、一九七八、二四二―二四七頁、柳田、一九九〇、一八六―二〇六頁）。このストーリーも仇討ちの点では武勇を示すヴァリエーションの一つである。しかし、この虎は、純粋に文字としての虎であり、またそれが悲劇のヒロインの名に採用されることによって虎退治物語群とまったく異なった世界をつくりだしたのだ。

以上、それぞれ、国際性、架空性、文字表象の異化作用という特徴をもった例であった。日本人がこれらの方向で虎にまつわる物語を再生産するときに、暴力性や閉鎖性は中和され、韓国や中国の人々との、さらには虎の民俗を有する世界の人々との創造性に満ちた語り合いが可能となるだろう。

5　人知を超える虎

衝撃の虎体験

じつは虎退治譚と性格を異にする、人間の力を超えた虎のイメージが、か細い水脈であるが、日本にも伝承されているように思われる。先に『宇治拾遺物語』から二つの虎退治譚を紹介したが、そこには、「虎の鰐取（わに）りたる事」（筆者注　鰐は鮫（さめ）の古名）という異質の物語が収録されている。日本の筑紫（九州）の商人たちが、新羅で商売を済ませた帰国の途上、海岸で水を補給中に思いがけず虎の襲撃に遭った恐怖、その直後、目の前で展開された虎と鰐鮫との死闘の顛末を伝えた目撃談である。

何人かが水を汲むために陸に上がっている間、船に残っていた者が、うつ伏して見るともなく見ていた海面に山の姿が映り、高さ三、四十丈（一丈は約三・〇三メートル）ばかりの山岸にうずくまってこちらを狙っている虎の姿に気づいた。「これは一大事」と船中の者たちに知らせ、上陸していた人々を呼び乗せて大急ぎで岸を離れた。その刹那、虎が船を目がけて飛び下りてきた。しかし幸い虎は船から一丈ばかり離れたあたりに着水した。人々は胸をなでおろした。

船中から人々が虎の落ちたあたりを注視していると、間もなく虎は海面に浮かび出て、陸地に泳ぎ着き、水際の平らな岩の上に登って行く。見ると、左の前足の膝から下が噛み切られ血が流れている。「鰐鮫に食い切られたらしい」と目を離さずにいると、虎は噛み切られた方の足を海にひたしながら

うつ伏している。「どうするつもりか」と見ていると、冲の方から件の鰐鮫が虎を目がけて接近してきた。その瞬間、虎は右の前足で鰐鮫の頭に爪を立てて浜辺一丈ばかりの地点に投げ上げた。のたうちまわっている鰐鮫に躍りかかり、顎（あご）の下方に食らいつき、二、三度振り回してぐったりとさせてから、肩に担いで切り立った五、六丈もある断崖を三本の足で坂道を下るような速さで駆け上がって行った。

これを見ていた人々は、たいへんな衝撃を受けた。「もしあの虎が船に飛び込んでいたら、剣を抜いて防戦してみても無駄であったに違いない」と想像し、恐怖の思いに打ちのめされ、呆然たる気持ちで筑紫に漕ぎ帰った。

（小林、前掲、三一五―三一六頁。筆者により若干変更）

一読して、リアルな表現がきわめて印象的で、今まさに目撃の瞬間に立ち会ったかのような臨場感を覚える。ここに描き取られている虎は、打ち負かすことの不可能な、畏怖の感情を呼び覚ます存在といっていい。人間の予想を超えた力を存分に発揮している。

同じ話が平安時代末期、一二世紀前半に成立した日本最大の古代説話集『今昔物語集』にすでに収録されている。『宇治拾遺物語』が直接『今昔物語集』から再録したか、それぞれが別の史料から収録したかは定かでないが、全千話を超える『今昔物語集』のみならず、全一九七話の『宇治拾遺物語』にも載せられたこと、両者の重なりが八〇余話であることを考えると、かなり印象深い話として伝えられたことがうかがえる。

秀吉を脅かした虎

畏怖の対象としての虎については、近世に面白い伝説が存在する。京都の古刹、浄土宗の報恩寺に通称「鳴虎図」と呼ばれる掛け軸がある。中国の画人四明陶佾が宋または明の時代に描いた絵で、一五〇一年に後柏原天皇より下賜された寺宝である。平安京の宮城跡に大邸宅聚楽第（一五八七年完成）を建てた豊臣秀吉は、叔父が住職を務めていた報恩寺を訪ねた際、この猛虎図を気に入り、無理強いをして持ち帰った。床の間にかけて楽しんだが、夜中に虎の吠え声が聞こえて、一晩中眠れず、「これは鳴虎である」として報恩寺にすぐさま返した。すると、虎が泣き止んだという。以降、この寺は「鳴虎さん」の通称で親しまれ、「鳴虎図」は、寅年の正月三日間だけ一般に公開される。この伝説は、人間のいかなる権力者にも思い通りにならない存在としての虎を物語っている。

6　畏れと真実さのシンボル

巨匠クロサワの虎

そこで思い出すのが、日本映画界の巨匠黒澤明（一九一〇―一九九八年）が抱いた虎のシンボリズムである。彼は、太平洋戦争末期から敗戦直後にかけて製作した自身初の時代劇に、『虎の尾を踏む男達』（一九四五年）というタイトルをつけた。鎌倉幕府の草創期、兄源頼朝の怒りを買った源義経の一行が東北奥州へ逃げる途中、北陸の安宅の関所を通り抜けようとする。能「安宅」と歌舞伎「勧進帳」を題材に

取った有名なストーリーである。関所では、義経でないかと疑う頼朝の息のかかった関守達の前で、家来弁慶が旅の修行僧に見事になりすまし、絶体絶命の危機を乗り切る（黒澤、二〇〇二）。

「虎の尾を踏む」は『易経』を出典とし、日本でも度々用いられる諺で、きわめて危険なことをするたとえであるが、映画では、眼前に立ちはだかる巨大な権力機構の只中を通り抜ける、薄氷を踏むかのごとき行為を意味している。作中に虎は登場しないが、終盤のクライマックスで「虎の尾を踏み〜」とコーラスが入る場面が印象的だ。虎は現実の権力機構を象徴しているが、真の権力者（頼朝）は背後にいるため目に見えない不気味さがただよう。黒澤は、太平洋戦争中の日本軍あるいは敗戦後の占領軍といった権力機構を念頭に置いていたのだろうか。あるいは、それらをも超えた悲劇的な何かを表現しようとしていたのかもしれない。

幻の大作となったハリウッドとの合作『トラ・トラ・トラ！』で、黒澤は、個々の人間の思惑と力を遥かに超えて引き起こされる大戦争の真実を、映像作品として描き切ろうとした。「トラ・トラ・トラ」は一九四一年一二月八日の真珠湾攻撃を伝える暗号電信であり、「我、奇襲に成功せり」を意味すると一般に考えられている。これについては、符合「ト」は「全軍突撃せよ」、「ラ」は送受信が容易で誤りが発生しにくい符合で短点三つ「･･･」を表しているという説がある。いずれにせよ、「トラ・トラ・トラ」はもともと虎を意味していない。しかし、黒澤は、ハリウッドの依頼を受けた後、膨大な資料を集めて完成させた脚本の準備稿（一九六七年）に、『虎　虎　虎』のタイトルをつけ、製作発表会でも「TORA, TORA, TORA !」の英字タイトルと共にこれを用いた。黒澤が虎の字にこだわったのは、虎という動物が、

自分が映画という手段によって悪戦苦闘しつつ表現しようとしている畏怖すべき戦争の悲劇を象徴していると考えたためだろう。

彼は、太平洋戦争を、トルストイの『戦争と平和』のような巨視的視座から描き切らなければならないという芸術家としての義務感に取り憑かれていた。太平洋戦争回避を願いながら連合艦隊司令長官として真珠湾攻撃を指揮する巡り合わせになった山本五十六と、アメリカの太平洋艦隊を率いたキンメル司令長官に焦点を当てた。そして、日米間に厳然と横たわる組織とコミュニケーションの相違が招いた悲劇として、真珠湾のストーリーを捉えようとした。製作に取組んでいた黒澤の考えが伺える言葉が手紙や覚書等に遺されている。黒澤が虎という言葉にどのような意味を込めていたかが一目瞭然である。

「楽じゃないよ。なにしろ、三匹の猛虎が相手だからな。怒らせたら最後なんだよ。」

「申年になりましたが、こちらは当分虎年です。参考文献を読む事山の如く、原稿を書き流す事大河の如く、いやはや大変な仕事です。」

「天皇も大統領も、自分自身がジョーカーなのに、そのオールマイティのために、自分自身が動けない。そういう組織、そういう人間的限界の上に組み立てられている今世紀！　このオカシナ、オカシナ現実に今の地球は左右されているのです！……『虎　虎　虎』はそういう意味でコワイ、コワイ、お話でなければなりません。」

「少なくともこっちの腹にドンと据えて置かなければ、『虎　虎　虎』はネコ、ネコ、ネコになりますよ！」

（田草川、二〇〇六、一二八頁、一八二―一八三頁）

これほどまでに製作に没頭していた黒澤であるが、京都でのロケ中にスケジュールの大幅な遅延を招き、ハリウッドの担当者から奇行を頻発していると判断され、ついに監督を降ろされてしまう。このプロジェクトのもともとのアイデアは、日本側のシーンを日本人がアメリカ側のシーンをアメリカ人が撮り、それらを総合編集しようとするものであったが、黒澤自身が、日米間の組織とコミュニケーションの相違による悲劇を招来する役回りとなってしまった（田草川、前掲）。黒澤は『トラ・トラ・トラ！』の失敗の傷を一生癒すことができなかったという。

また、黒澤には、生きた虎が登場する『デルス・ウザーラ』（一九七五年）がある。ロシア人探検家アルセーニエフと先住民の猟師デルスのシベリアを舞台とした交流を通じて、自然と人間の真実に迫ろうとする作品である。物語のなかで、デルスはアルセーニエフを救うために虎に向かってとっさに発砲するが、そのことがきっかけで死の影に脅え始める。デルスにとって虎は森の神の使いであり、目の前で死を見届けなかったにせよ、傷を負わせ殺めたかもしれないという想いは去る事がない。

このように、黒澤が抱いていた虎イメージは、人間の力を超えているだけでなく、畏怖の対象であり真実さのシンボルでもあったと言えよう。虎退治譚と結びつく閉鎖的な虎イメージを乗り越える方向性として国際性、架空性、文字表象の異化作用を先に挙げたが、人間の力を超えた何かに正面から向き合うこの真実さのシンボリズムを尊ぶことが、合わせて重要なことであろう。

『ジョゼと虎と魚たち』

日本映画『ジョゼと虎と魚たち』（二〇〇三年）に登場する虎も、じつは同じ系譜に連なる。原作は、田辺聖子が一九八四年に発表した同名短編小説で、足が不自由で外出がままならないジョゼと二つ年下の大学生恒夫の出会いと愛を、独特の浮遊感で描くものだ。ジョゼにとって虎は世の中で最も怖い存在であり、ボランティアに付き添われて一度だけ動物園に行ったことがあったが、鳥、猿、象は見れたけれども時間制限のために見ることができなかった。初めて二人が結ばれた後、ジョゼは虎を見につれていってほしいと恒夫に懇願する。

ジョゼは虎を見て、思った通りだと気に入った。虎が猛獣特有のしぐさで、檻の中を飽くことなく行ったり来たり、を繰り返すのに見とれていた。その抑えつけられた凶暴なエネルギーを思わせる、物狂おしい黄色い虎の眼、それがジョゼにそそがれると、ジョゼは怖ろしさで身震いする。そのくせ、怖いもの見たさの好奇心が強い。

虎は、行ったり来たりの運動を止め、ジョゼの前で停まる。ジョゼの胸は、息苦しいまで恐怖と不安にたかまる。やがて虎は、その一博（ひとう）ちで象でも倒しそうな力強い前肢（あし）で、コンクリートの床をやるせなげに叩き、身もだえして咆哮した。

黄と黒の強烈なまだらの毛は、虎の動きにつれて陽に輝く。ジョゼは咆哮を聞いて失神するほど怖かった。恒夫にすがって、

「夢に見そうに怖い……」

「そんなに怖いのやったら、何で見たいねん」

「一ばん怖いものを見たかったんや。好きな男の人が出来たときに。怖うてもすがれるから。……そんな人が出来たら虎見たい、と思てた。もし出来へんかったら一生、ほんものの虎は見られへん、それでもしょうない、思うてたんや」

（田辺、一九七七、一九九頁）

あるいは、ここに描かれた虎も、動物園に捕らえられている虎である以上、虎退治譚につながるのかもしれない。しかし、自身狭い世界に閉じ込められているジョゼは、中島敦や萩原朔太郎のように、虎に自分を重ねたりはしていない。田辺は、ここで、畏怖すべき存在として虎を登場させ、一人の女性が孤独のなかで必死につかんだ愛に対置している。畏怖すべき存在は、どこかで真実さの一片につながっている。逆に、真実さは畏怖の感情を伴っている。

日本人が語る虎の物語は、二一世紀に入り、普遍性と国際性を求めて、始まったばかりなのである。

主要文献

一

大槻文彦『新訂　大言海』富山房、一九五六

新村出「寅の歳・虎の語源」『語源をさぐる』教育出版、一九七六

あらかわそおべえ『外来語辞典』角川書店、一九七七
白川静『字通』平凡社、一九九六
日本国語大辞典第二版編集委員会、『日本国語大辞典　第二版⑨』小学館、二〇〇一
白川静『字統』平凡社、二〇〇四
白川静『字訓』平凡社、二〇〇五
加納光『動物の漢字語源辞典』東京堂出版、二〇〇七

二

高田真治他訳『易経（上）』岩波文庫、一九六九
宮地伝三郎『宮地伝三郎動物記1　十二支動物誌』筑摩書房、一九七二
山中襄太『語源十二支物語』大修館書店、一九七四
大場磐雄『十二支のはなし』ニュー・サイエンス社、一九八三
諸橋轍次『十二支物語』大修館書店、一九八八
金子浩昌他『日本史のなかの動物事典』東京堂出版、一九九二
保立道久「虎・鬼ヶ島と日本海海域史」『中世の生活空間』戸田芳実編、有斐閣、一九九三
南方熊楠『十二支考（上）』岩波文庫、一九九四
柳宗玄『十二支のかたち』岩波書店（同時代ライブラリー）、一九九五
石田尚豊編『聖徳太子事典』柏書房、一九九七
五十嵐謙吉『十二支の動物たち』八坂書房、一九九八
小島憲之他校注・訳『新編日本古典文学全集　日本書紀③』小学館、一九九八
中村浩『動物名の由来』東京書籍、一九九八
王敏・梅本重一編『中国シンボル・イメージ図典』東京堂出版、二〇〇三

伊藤亜人監訳『韓国文化シンボル事典』平凡社、二〇〇六

三

高田真治他訳『易経（上）』岩波文庫、一九六九
長谷川伸「ランプ虎」『長谷川伸全集』第十四巻、朝日新聞社、一九七二
宮地伝三郎『宮地伝三郎動物記1　十二支動物誌』筑摩書房、一九七二
山中襄太『語源十二支物語』大修館書店、一九七四
福田清人編著「虎退治」『宇治拾遺物語』偕成社、一九七五
稲田浩二他編『日本昔話事典』弘文堂、一九七七
芥川龍之介「虎の話」『芥川龍之介全集』第八巻、岩波書店、一九七八
坪田譲治編「虎こ石と虎が雨」『日本の伝説　東日本編』偕成社文庫、一九七八
藤沢衛彦編『日本の神話伝説Ⅱ（世界神話伝説体系9）』名著普及会、一九七九
大場磐雄『十二支のはなし』ニュー・サイエンス社、一九八三
田辺聖子『ジョゼと虎と魚たち』角川文庫、一九八七
諸橋轍次『十二支物語』大修館書店、一九八八
山本周五郎「虎を怖るる武士」『生きている源八』新潮文庫、一九八八
柳田国男「老女化石譚」『柳田国男全集』第十一巻、一九九〇
渡辺守邦・渡辺憲司校注『仮名草子集（新日本古典文学大系七四）』岩波書店、一九九一
金子浩昌他『日本史のなかの動物事典』東京堂出版、一九九二
保立道久「虎・鬼ヶ島と日本海海域史」『中世の生活空間』戸田芳実編、有斐閣、一九九三
坪井秀人「屋上の虎・『氷島』の世界」『萩原朔太郎（日本文学研究大成）』田村圭司編、図書刊行会、一九九四
中島敦『山月記・李陵　他九編』岩波文庫、一九九四

南方熊楠「虎に関する史話と伝説民俗」『十二支考』（上）、岩波文庫、一九九四
岡雅彦『一休ばなし　とんち小僧の来歴』国文学研究資料館編、平凡社、一九九五
杉本苑子『太閤さまの虎』中公文庫、一九九五
近松門左衛門「国性爺合戦」『近松全集』第九巻、岩波書店、一九九五
柳宗玄「寅」『十二支のかたち』岩波書店（同時代ライブラリー）、一九九五
五十嵐謙吉『十二支の動物たち』八坂書房、一九九八
小島憲之他校注・訳『新編日本古典文学全集　日本書紀③』小学館、一九九八
中村浩『動物名の由来』東京書籍、一九九八
稲田浩二編『日本の昔話』下、ちくま学芸文庫、一九九九
黒澤明『黒澤明監督作品　虎の尾を踏む男達』ＤＶＤ、日本ヘラルド映画、二〇〇二
ユーリー・サローミン「虎は私に向かってきた」『黒澤明監督作品　デルス・ウザーラ』ＤＶＤ、日本ヘラルド映画、二〇〇二
犬童一心『ジョゼと虎と魚たち』ＤＶＤ、アスミック、二〇〇六
田草川弘『黒澤明 VS. ハリウッド　『トラ・トラ・トラ！』その謎のすべて』文藝春秋、二〇〇六
立石憲利『岡山の動物昔話』日本文教出版、二〇〇七
小林保治「『宇治拾遺物語』に見える百済・新羅の虎の話」『中世文化の発想』勉誠出版、二〇〇八
西本豊弘『人と動物の日本史１　動物の考古学』吉川弘文館、二〇〇八
中澤克昭『人と動物の日本史２　歴史のなかの動物たち』吉川弘文館、二〇〇八
菅豊『人と動物の日本史３　動物と現代社会』吉川弘文館、二〇〇九
中村生雄『人と動物の日本史４　信仰のなかの動物たち』吉川弘文館、二〇〇九

付記

本稿は、財団法人・韓中日比較文化研究所（李御寧理事長　ソウル）の依頼により執筆した原稿を元に再構成したものである。

本稿の一「語源―日本の虎認識と語源説」、および、三「物語―虎退治譚を乗り越える精神の水脈」（「萩原朔太郎「虎」」と「衝撃の虎体験」の引用文第一段落を除いたもの）は、『十二支神　虎』（李御寧編　センガゲナム出版、二〇〇九年一二月、原題『십이지신 호랑이』이어령 편 생각의나무）に、それぞれ「日本の虎認識と語源説」（原題「일본의 호랑이 인식과 어원설」）、「虎退治譚を乗り越える精神の水脈」（原題「호랑이 퇴치담을 뛰어넘는 정신의 수맥」）として掲載された（韓国語版・翻訳　李珣淑）。